iv） 昭和 60 年以降（1985~）の知見

図表 5- 7　昭和 60 年代以降（1985~）の肝炎研究に関する概要と背景

<table>
<tr><th>年</th><th>主な出来事</th><th>肝炎研究の進展</th><th>肝炎の予後の認識</th></tr>
<tr><td>1985 (S60)</td><td>12 月：カッター社の加熱第 IX 因子製剤『コーナイン HT』輸入承認
12 月：ミドリ十字の加熱第 IX 因子製剤『クリスマシン HT』輸入販売承認</td><td></td><td rowspan="4">昭和 50 年代（1975~1984）に引き続き、非 A 非 B 型肝炎の予後に関する知見が集積されていった。
C 型肝炎ウイルスゲノムのクローニングをきっかけに、C 型肝炎の診断が可能となり、これにより従前は非 A 非 B 型肝炎として研究されていた慢性肝炎の多くが C 型肝炎であることが判明した。</td></tr>
<tr><td>1987 (S62)</td><td>1 月もしくは 3 月：青森県三沢市の産婦人科医が、「製剤で妊婦が肝炎に連続感染した」と厚生省に報告
4 月：ミドリ十字の加熱フィブリノゲン製剤『フィブリノゲン HT-ミドリ』製造承認</td><td></td></tr>
<tr><td>1988 (S63)</td><td></td><td>C 型肝炎ウイルスゲノムのクローニングに一部成功</td></tr>
<tr><td>1990 (H2)</td><td>ミドリ十字、抗 HCV 抗体ドナースクリーニングの予備検査を実施</td><td></td></tr>
</table>

<u>昭和 60 (1985)年以降の知見について</u>

昭和 60(1985)年代以降も、昭和 50 年代（1975~1984）に引き続き、非 A 非 B 型肝炎の予後に関する知見が集積されていった。そして 1988 (S63)年の C 型肝炎ウイルスゲノムのクローニングをきっかけに、C 型肝炎の診断が可能となり、これにより従前は非 A 非 B 型肝炎として研究されていた慢性肝炎の多くが C 型肝炎であることが判明した。この後、1990(H2)年の西岡久壽彌、同年の清澤らの報告（文献 5-8-6, 5-8-7, 5-8-8）に見られるように、C 型肝炎が慢性化率や肝硬変への進展率が高い疾患であるとの報告がなされており、さらに清澤らの報告では C 型肝炎から肝硬変、肝がんへ進展するまでの期間についても報告されている。

最も新しい、慢性肝炎治療ガイド 2008（日本肝臓学会編）（文献 5-8-15）では、C 型肝炎の自然経過として、清澤らの文献（文献 5-8-8）を引用し、感染後 10 年、21 年、29 年でそれぞれ慢性肝炎、肝硬変、肝細胞癌に進展するとし、さらに HCV 感染から 20 年後に肝硬変に進展する頻度はおよそ 10-15%、HCV キャリアのうち、最終的に肝疾患で死亡するのは 20%前後と推定される、としている。